

大豆「すずほのか」の栽培法（極晩播狭畦栽培）

古川農業試験場

1 取り上げた理由

本県の小粒大豆慣行栽培での播種晩限は7月上旬であるが、麦作、特に小麦作との組合せを考えた場合、7月中、下旬（極晩播）までの播種晩限の拡大が要望される。普及に移す技術第85号では、「すずほのか」の早生で耐倒伏性に優れる特性を活かし、狭畦密植により7月中旬播種に適応可能であることを示したが、さらに、極晩播の狭畦密植栽培における播種晩限および栽植密度、栽植様式について目安が得られたので参考資料とする。

2 参考資料

- 「すずほのか」において、7月中旬の狭畦密植栽培では、栽植密度を33本/㎡より高めることで、慣行栽培を上回る収量が得られる。ただし、倒伏程度が高まるため、栽植密度は40本/㎡程度までに留める。また、7月下旬播種では慣行と比べ減収するため、播種は7月中旬までとする（図1）。
- 7月中旬の狭畦密植栽培では、条間25cmでは株間20cm、条間30cmでは株間約16cm（栽植密度はいずれも約40本/㎡）が適した（図2）。

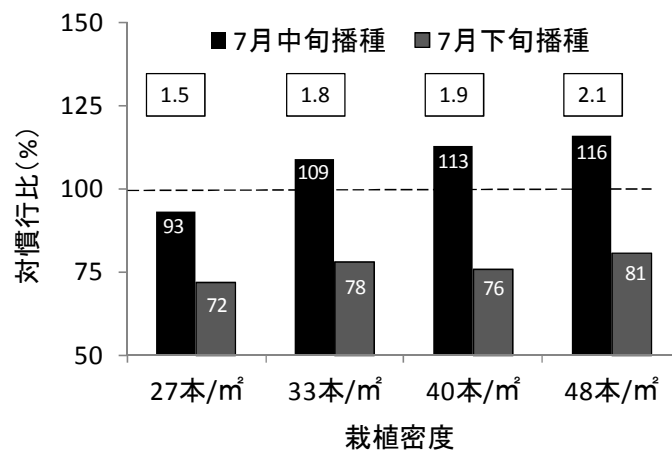


図1 7月中旬、下旬播種の「すずほのか」狭畦栽培における栽植密度と子実重、倒伏程度との関係（平成21、22年の平均値）

注1) 図中の白抜き数字は、対「すずほのか」慣行比を示す（慣行区の子実重は257kg/10a）。
 注2) 慣行は、7月上旬播種、栽植密度27本/㎡（条間75cm）、狭畦栽培は条間25～37.5cmである。
 注3) 図中の囲み数字は、7月中旬播種の倒伏程度（0（無）-5（甚）の6段階）を示す。
 注4) 栽植密度27本/㎡区は平成22年のみのデータである。

3 利活用の留意点

- ここに示したデータは、古川農業試験場（北部平坦）において得られたものである。
- 「すずほのか」の特性については、普及に移す技術第83号を参照のこと。
- 慣行の播種期では条間75cm、株間10cmの2粒播（栽植密度27本/㎡）が適する。ただし、この栽植様式では、7月中旬播種では減収する（普及に移す技術第85号）。

（問い合わせ先：古川農業試験場水田利用部 電話0229-26-5106）

4 背景となった主要な試験研究

1) 研究課題名及び研究期間

新品種栽培法の早期確立 平成17～18年

麦類・大豆の加工適性を重視した品種選定と栽培法の確立 平成19～22年

2) 参考データ

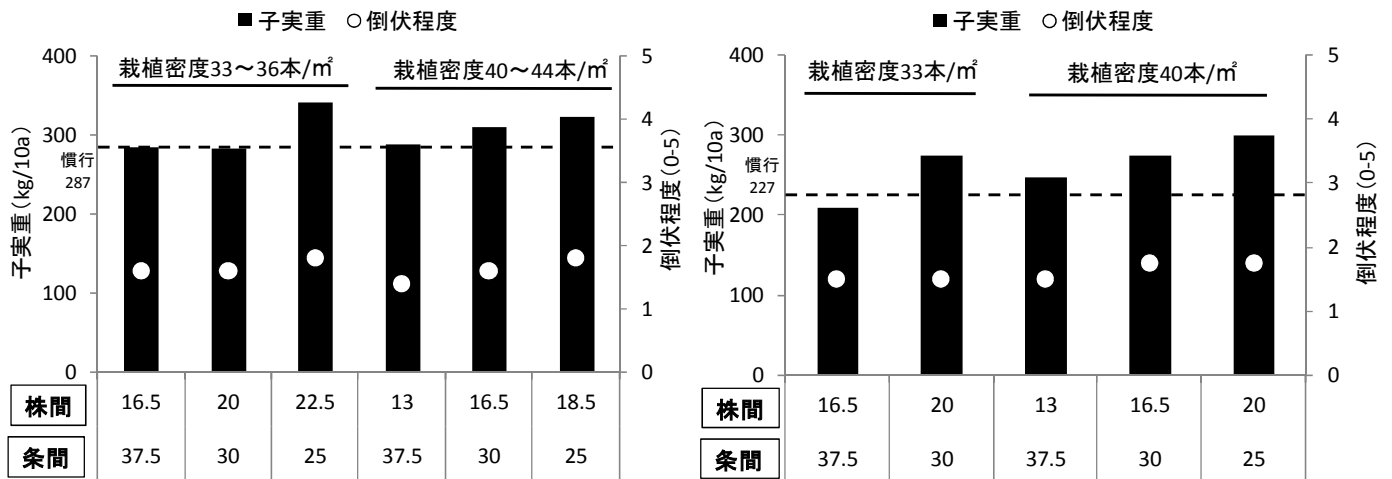


図2 「すずほのか」の7月中旬播種における、栽植様式と子実重、倒伏程度との関係
(左：平成21年，右：平成22年)

注1) 図中，横軸上段は株間，下段は条間を示す。

注2) 倒伏程度は0(無)～5(甚)の6段階で表示。

注3) 図中，破線は子実重の対照慣行の子実重を示す補助線である。

3) 発表論文等

a 関連する普及に移す技術

a) 大豆奨励品種「すずほのか」(第83号普及技術)

b) 大豆「すずほのか」の栽培法(第85号参考資料)